

「Dear メ メ」

阿久津  
朋  
子

## あらすじ

夏祭りの夜、一匹の金魚を手にしたまま平山透子(6)は、母親の平山恵(27)に神社の境内に置き去りにされる。

それから八年後。中学二年生になった透子(14)は誰とも馴染まず、ただ淡々と毎日を過ごしていた。そんなある日、一緒に暮らす祖父母の家へ帰ると、そこには八年ぶりに会う恵(35)の姿が。悪びれることのない恵を拒絶する透子。と同時に「なんで今更」と動揺するのであった。

そんな透子の気持ちなどおかまいなしに、恵は祭りでも和太鼓を叩く透子のために衣装の法被を自分が縫うと言いつ出す。真夜中にひとり法被を作る恵の背中を見て、少しの嬉しさを感じ、恵はもう一度自分とやり直すために戻ってきたのだと思う透子。けれど実際は、恵は生活費に困り、祖父母にお金を借りるためだけに戻ってきたのだ。それを知り、大きなショックを受ける透子。その上、恵が作った法被には不恰好な金魚が刺繍されていて、その金魚に置いていかれた日のことが重なった透子は再び恵を罵る。だが、そんな透子に恵は、自分も本当はちゃんとした母親になりたかったと言う。我が子を愛せない自分に恵もまた苦しんでいたのだ。

だが、恵を許せず家を飛び出した透子は学校で部活の顧問である橋口美穂(29)と会う。ポツポツと恵のことを話す透子は美穂に、自分にとって家族というものが遠すぎると呟く。すると美穂は家族とはそういうものだと言う。「家族になれること自体奇跡に近いこと」だと。しかし、「その奇跡はきつと誰

もが掴める唯一の奇跡」だとも……。

結局、再び別れて暮らすことになった透子と恵だが、恵は透子に手紙を書く約束をする。

数日後、透子の机の上には、開封された恵からの手紙と、『Dear ママ』とだけ書かれた、書きかけの便箋が広げられているのであった。

## 登場人物

平山透子	(6)	中学2年生
平山恵	(27)	透子の母
橋口美穂	(29)	水泳部顧問
平山佳子	(54)	透子の祖母
平山良雄	(62)	透子の祖母
女子生徒A	(65)	透子の祖父
女子生徒B		
女子生徒C		
男性教員A		
和太鼓講師		
屋台の店主		

## ○ 岩上神社・外観（夜）

真つ暗な空の下、神社だけが提灯や屋体の光で溢れている。お囃子の音が響き、浴衣や法被姿の家族連れや若者達等が次々と赤い鳥居をくぐって行く。

鳥居傍の看板には「岩上祭り」の文字。

## ○ 同・境内（夜）

敷地の中央には櫓があり、子ども達が和太鼓やお囃子を演奏し、周囲は出店で賑わっている。

## ○ 同・金魚すくいの屋台前（夜）

はしゃいで金魚をすくう平山恵<sup>(27)</sup>。隣で、金魚をじっと見ている平山透子<sup>(6)</sup>。二人とも浴衣姿である。

屋台の水槽にはたくさんのお金魚。

恵 「きやー！ また破れたー！」

店主 「（笑いながら）はい、残念」

恵 「あくもうダメ。やめたー！」

店主、金魚を一匹袋に入れながら、

店主 「はい、母ちゃんの三分の残念賞」

じっと金魚を見ていた透子の前に袋に入れた

金魚を掲げる店主。

恵 「やった、おじさん、ありがと」

透子 「……（金魚を受け取る）」

恵 「じゃ、あっち行くよ、透子」

さっさと歩き出す恵。

透子、名残惜しそうに水槽を見てから、恵の

傍に駆け寄る。

と、恵の手がちょうど透子の目の高さになり、

その恵の手をじっと見る透子。

二人の横を手をしっかりと繋いだ親子がすれ違っていく。透子、その親子を横目で一瞥した後、恵の手を握ろうとそっと手を伸ばす。と、一瞬恵の手がびくつとなり、透子の手を振り払うように前方を指差す恵。

恵 「ほら、あそこ」

透子 「……」

透子を見ることなく足早に歩く恵。

立ち止まり、恵の後ろ姿をじっと見る無表情の透子。

と、ポツポツと突然降り出してくる雨。

恵 「（夜空を見上げ）あ」

恵につられ、夜空を見上げる透子。

## ○ 同・本堂前（夜）

本堂の軒下で雨宿りをする人々に交じり並んで立っている透子と恵。

落ち着かない様子で辺りをちらちらと横目で

見ている恵。

恵 「せっかくのお祭りが台無しだね」

透子 「うん」

恵 「まあ、もう終わりだったか」

透子 「うん」

透子をちらりと見下ろす恵。

手にしている金魚を眺めている透子。

と、恵、再び周囲を見てから、

恵 「金魚、そのままだと濡れちゃうね」

驚いたように恵を見上げる透子。

透子 「水の中でも？」

恵 「そ、そう、水の中でも……だからママ傘買っ

てくるからここで待ってて」

じっと恵を見る透子。

恵 「ね？ 急いで戻ってくるから」

透子、頷くと金魚に目をやる。

恵 「ちゃんとここにいるんだよ」

透子、黙って頷く。

辺りをちらりと見てから小走りで軒下を出て

行く恵。

金魚をじっと見ている透子。

× × ×

雨は止み、軒下の人々の姿もなくなり、透子だけが座り込んでじっとしている。

佳子の声「透子ー！ 透子ー！」

前方から走ってくる平山佳子<sup>(54)</sup>。

透子、立ち上がり佳子の姿を見ながら金魚の

袋を持つ手を固く握る。

## ○ 常北中学校・外観

築数十年の様相の建物。小さな田舎の学校という雰囲気である。

真夏の強い陽射しをうけたグラウンドで、野球やサッカーの部活動をしている生徒達の姿。

グラウンドの隅ではサッカーのユニフォームを着た生徒達数人を男性教員Aが怒っている様子である。

T「8年後」

## ○ 同・プール

フェンスで囲まれたプールの中でプールサイ

ドに掴まりながらバタ足をしている数人の女子生徒達。

プールサイドにはタルそうに椅子に座っている橋口美穂(29)の姿。

女子生徒A「ねえ、法被できた?」

女子生徒B「まだ。なんかお母さん、糸がないとか言ってる」

女子生徒C「私、自分で作ってるんだあ」

女子生徒A「え、すごーい」

と、歩いてくる水着姿の平山透子(14)。

女子生徒A、透子に気付き、

女子生徒A「あ、透子ちゃんは法被できた? 岩上祭りの」

透子「……」

透子、女子生徒達を一瞥するが、何も答えず、そのままプールに飛び込む。

顔を見合わず女子生徒達。

美穂の声「(大声で)平山さーん! あれほど飛び込むなって言ったでしょー!」

何も答えず平泳ぎを始める透子。

女子生徒A、B、Cは透子と美穂を交互に見てから、

女子生徒C「(女子生徒Aに) あんた何で透子なんかに聞いたの?」

女子生徒A「だって、近くにいたから」

ひとり泳いでいる透子。

透子を呆れたように見ている美穂。

美穂「(咳く) だから嫌なのよ」

皆から外れるように、ひとり黙々と泳ぐ透子の姿。

○ 平山家・外観

木造平屋建の昔ながらの日本家屋。庭には農機具などが置かれている。

自転車に乗って走ってきて、そのまま手馴れたように自転車を庭に停め、玄関に入つていく透子。

○ 同・玄関・中

玄関を開け、中に入ってくる透子。

透子「(小さな声で) だいたい」

と、玄関に、くたびれた白いサンダル。

透子「?」

と、突然家の奥から、

平山の声「一体何を考えてんだ!」

透子「!」

透子、家の奥へ目を向ける。

○ 同・中・居間

そろそろと居間の中を覗く透子。

テーブルの前で胡坐をかき怒っている平山良雄(65)と隣に並んで座っている平山佳子(62)が同時に透子を見る。

佳子「透子!」

と、その向かいに座り、透子を振り返る平山

恵(35)

恵「透子?」

恵、ぱつと立ち上がり透子に抱きつく。

透子「久しぶりー!」

透子「!」  
呆然としたまま動かない透子。

恵「どうしたの? ママよ、ママ!」

透子「マ……ママ?」

ゆつくりと恵の顔へ目を向ける透子。

恵「(笑顔で) 元気にしてた?」

透子「……」

と、パツと恵を突き放す透子。

恵「ぎゃっ!」

勢いで障子に軽くぶつかる恵。

恵「いったー、ちょっと何すんのよ!」

透子、明らかに動揺した様子で恵を見ていたが、突然部屋の隅に駆け寄り体操服を掴む。

透子「わた、私、太鼓の練習に行ってくる」

佳子「あ、ああ、そうだね。時間だものね」

恵「ちよつと! ママが帰ってきたのよ!」

居間を出ようとする透子の腕を掴む恵。

びくつとし恵の手を振り払う透子。

恵「!」

一瞬、恵に目を合わせた透子だが、そのまま逃げるように出て行く。

恵「ちよつとー!」

平山「当然だ」

恵「……びくつくりしてるだけよ、あの子」

くたびれたようなバッグから煙草を取り出し銜える恵。が、ちらりと平山と佳子を見る。咎めるように見ている平山と佳子。

恵「……」

バッグに煙草をしまい、座りなおし、麦茶を飲む恵。そのコップを持つ手が微かに震えている。

○ 道

険しい表情で自転車を夢中で漕いでいる透子。ハンドルを握る手に力を入れると更にスピードを上げていく。

○ 平山家・中・透子の部屋

障子を開け中に入り、部屋を見回す恵。教科書等が並べられている勉強机の他にはあまり物がない殺風景な部屋。  
恵、勉強机にそつと触り暫くじつと机を見つめたまま立っている。

○ 公民館・外観

ブレハブのような古びた建物。中からは和太鼓とお囃子の音が響いている。

○ 同・中

数十人の子供達が和太鼓や笛などを演奏している。  
その中に交じり、和太鼓を叩いている透子の姿。透子、どこか上の空で太鼓を叩いていると、突然手元からバチが飛ぶ。一瞬呆然とし、動かない透子。

講師の声「どうした? 平山」

透子、我に返り、慌ててバチを拾い、再び叩き始める。

○ 平山家・前から庭へ(夕)

自転車を押しながら歩いてくる透子。と、足を止め家の前をじつと見る。

家の前で煙草をふかし、立っている恵。

透子、一瞬躊躇うがそのまま自転車を押しながら家へ歩いて行く。

恵、透子に気付くと煙草を採み消し、

恵 「(きこちない笑顔で) お帰り」

透子 「……」

透子、無視して庭に自転車を止める。

恵 「太鼓の練習はどうだった?」

透子 「……」

恵 「ね、透子。ママとお話ししよ」

透子 「……」

そのまま家の中へ入ろうとする透子。

と、透子の腕を掴む恵。

透子 「何すんの!？」

恵 「ね、透子、8年ぶりじゃない? ママによく顔見せて」

恵を睨みつける透子。

恵 「透子、ママの話も聞いて? ね、お願い」

透子 「何を? 何の話があるの? 私のこと捨てて

つたくせに今更何の話があるの?」

恵 「あの日、あの祭りの日、透子を雨の中置いて

いったことはママちゃんと悪いと思ってるの」

透子 「……」

恵 「でもね、透子も同じだったんでしょ?」

透子 「なにが?」

恵 「何がって、ママ、わかってたのよ。透子だった

て……、透子だってママのこと」

透子 「(遮るように) 死んだの」

恵 「え?」

透子 「あの時の金魚、3日で死んだ」

恵 「?」

透子 「私、あなたがなくなった時よりいっぱい泣いた」

恵 「透子……」

透子 「ずつとずつと悲しかった!」

恵の手を振り払い玄関へ走り去る透子。

透子の後ろ姿をじつと見ている恵。

と、恵の携帯の着信音。

恵 「もしもし……うん、うん。もう少し待って。

うん、うん、大丈夫。もう少し頼んでみるから

うん、じゃあね」

携帯を切ると、再び煙草に火をつける。

恵 「(呟く) 3日で死んだ、か」

ゆっくりと煙草を吸い込む恵。

○ 同・透子の部屋・中(夜)

真つ暗な部屋で布団に横になり、じつと天井を見つめている透子。

恵の声「透子もママと同じだったんでしょ? 透子

だってママのこと」

と、透子、バツと寝返りを打ち、掛布団を頭

まですつぽりと被る。

○ 同・玄関・中

汚れた白いサンダルを履き、玄関を出ようと

する恵。

佳子の声「どこ行くんだい?」

恵 「ちよつとタバコ買ったから」

佳子 「あんた、タバコ買うお金があるんだつたら」

恵、やや顔をしかめ、遮るように、

恵 「精神安定剤みたいなものなのよ、タバコは。

だから必要なの」

佳子 「(溜息)」

呆れたように恵を見る佳子。

恵、急に佳子にすぐるように、

恵 「でも、本当に助けて欲しいのよ」

佳子 「……」

恵 「ね、お願い。お願いします」

しおらしく佳子に頭を下げる恵。

佳子、一度行きかけるが再び恵に、

佳子 「あんた、透子とは話したのかい？」

恵 「ああ、うん、まあ。でも久しぶりだしね。じ

ゃあ、ちよつと行ってくるわ」

逃げるように玄関を素早く出る恵。

○ 同・玄関・外

閉めた玄関に寄り掛かり、やや考え込んだ表

情の後、勢いよく歩き出す恵。

○ 常北中学校・職員室・中

ひとり、書き物をしている美穂の姿。

と、ジャージ姿の汗をかいた男性教員Aが入

ってくる。

男性教員A 「あ、お疲れ様です」

美穂 「お疲れ様」

男性教員A 「橋口先生も今日は指導日ですか？」

美穂、書き物をしながら、

美穂 「いえ、今日はいろいろとこっちの方をやって

おかなきゃと思って」

男性教員A 「そうですか。そういえば、どうです？

水泳部は」

美穂 「まあ、なんとか」

男性教員A 「まあ、水泳部は問題を起こすような子

もいませんからね。羨ましいですよ。それに比

べてうちは……」

急にペンを持つ手が止まる美穂。

美穂 「(眩く) 問題ねえ」

男性教員A 「え？」

美穂、つくったような笑顔で、

美穂 「いえ、私もただの人間ですから、問題なくて

も苦手な生徒はいるな、と」

男性教員A 「(笑って) あ、それが真つ当な教師か

もしれませんよ」

美穂 「それもそうかも」

と、職員室の入り口から、

恵の声 「すみません」

入り口を見る美穂と男性教員A。

入り口には美穂たちを窺う恵の姿。

美穂 「？」

○ 同・プール

人気のないプールでひとり黙々と泳いでいる

透子。

美穂の声 「(大声で) ちょっと、誰？」

泳ぎを止め、声の方を振り返る透子。

透子に気付き、呆れた表情になる美穂。

美穂 「平山さん、あなた何勝手に泳いでるのよ？」

透子 「水泳部員ですから」

美穂 「知ってるわ、私顧問ですから。だから今日は

練習日じゃないことも知ってるの」

透子 「自主練です」

美穂 「届出でてないわよ」

透子 「さつき思い立ったんで」

美穂 「……」

じつと見合う透子と美穂。

美穂、大きく溜息を吐き、

美穂 「ねえ、ひとつ聞いていい？」

透子 「なんでですか？」

美穂 「私、あなたに何かした？」

透子 「？」

美穂 「まあ、別に何かしたとしても謝る気はない

んだけど一応聞いておこうと思って」

透子 「特に私も思い当たりません」

美穂 「じゃあ何でそういう態度なわけ？」

透子 「別に橋口先生に対してだけってわけじゃあり

ません。元々こういう風なんです」

美穂 「(呆れて) あっそ」

透子、再び泳ぎ始める。

美穂 「ちよつとだから泳ぐの止めてくれる？」

透子、端まで泳ぐと眩くように、

透子 「(小さく) 今更なんでよ」

美穂 「え？」

プールからあがり、すたすたと美穂の前を過

ぎる透子。

美穂も呆れたように透子に背を向けるが、思

い出したように振り返り、

美穂 「あ、そういえばさつき来たわよ」

透子 「(振り向き)？」

美穂 「あなたのお母さん」

透子 「え？」

透子の体からポタポタと垂れる雫の染みが、地面に大きく広がっていく。

○ 平山家・中・居間

座っている恵を鋭い目で見下ろし、恵に詰め寄っている透子。

透子「どうして!? なんでそういうことするのよ!」

恵、困ったような笑顔で、

恵「別にいいじゃない、母親なんだから」

透子「いつよ?」

恵「え?」

透子「いつ私の母親やったの?」

恵「お、オムツとかミルクとか、ちゃんとあげて」

透子「(遮って) ねえ! いつ!」

恵「だから……」

と、居間に慌てて入ってくる佳子。

佳子「一体どうしたんだい?」

佳子を見て一瞬口を噤む透子と恵。

佳子「透子、何があったんだい?」

透子、何も答えず興奮気味に肩で息をしながら、恵を睨んでいる。

佳子「透子?」

透子「この人が……この人が勝手に学校に」

恵「ちよつと、この人って……」

佳子「恵、あんた何しに学校に行ったの?」

恵「挨拶よ」

佳子「挨拶?」

恵「お世話になってますって。母親ってのはそういう事するもんでしょ? 私……」

恵、透子をちらりと見て、

恵「私はこの子の母親なわけだし……」

透子「(恵から顔を背ける)」

佳子「母親も何もあんたは……」

言葉を飲み込み、透子を窺う佳子。

居間を出て行くこうとする透子。

佳子「透子!」

透子、振り返ることなく小さな声で、

透子「太鼓の練習行ってくる」

恵「あ、透子! あれ、ママが作ってあげるからね」

ね

透子の足がびたりと止まる。

佳子も怪訝な顔で恵を見て、

佳子「あれ?」

恵「法被」

透子「!」

恵「いるんでしょ? お祭りで着る法被」

佳子「恵、あんたまさか太鼓の先生のとこにも行ったのかい?」

恵「ね、透子。作るからね、ママ。ね?」

透子「……」

何も答えず部屋を出て行く透子。

○ 公民館・中

数十人の子供達が和太鼓や笛などを演奏している。

講師「よーし、今日はここまで、明日は最後の練習だからみんな休まないようにな」

皆が帰り支度を始め、ざわつく室内。

透子も皆に交じり帰り支度を始める。

女子生徒C「ね、ね、見て見て。これやっとできた

んだあ!」

手作りの法被を羽織り、女子生徒AとBに嬉しそうに見せている女子生徒C。

女子生徒A「すっごーい! もうできたの?」

女子生徒B「自分で縫ったんでしょ?」

女子生徒C「そう。結構うまいでしょう?」

女子生徒A「うん、すっごーい!」

はしゃぐ三人をちらりと見る透子。

女子生徒C「みんなはもうできた?」

女子生徒B「今日にはできるって言ってたな、うちのお母さん」

帰り支度をする手が一瞬止まる透子。

女子生徒B「ちゃんと可愛い作ってくれるように

は言ったんだけど、かなり心配」

楽しそうに話す三人を一瞥するとそのまま外に出て行く透子。

○ 平山家・中・廊下／居間の中(夜)

タオルで髪を拭きながら歩くバジヤマ姿の透子。と、明かりが点いている居間の前を通る。

足を止め、ややじつと見つめた後そつと障子を

を開け中を覗く。

と、細い隙間から法被の布を裁断している恵

の背中が見える。

驚いたように恵の様子を見る透子。

不慣れな手つきで布を裁断する恵の姿。

恵の背中を暫く見つめた後、そつと障子を閉

める透子。

○ 同・透子の部屋・中(夜)

勉強机の引き出しを開け、奥の方から一枚の  
写真を取り出す透子。

写真には恵(27)と透子(6)の姿。

二人並んで写っているが、透子と恵の間はや  
や離れていて、透子に笑顔はなく、神経質そ  
うに顔を強張らせている。

恵の声「透子も同じだったんでしょ？」

離れて立っている二人の写真。

恵の声「ママわかったのよ。透子だってママのこ  
と」

写真をじっと見つめ唇を噛み締める透子。

### ○ 同・縁側(朝)

庭の朝顔などに水遣りをしている佳子。

と、透子が姿を現す。

透子「おはよう」

佳子「ああ、おはよう。早いね、今日は」

透子「うん」

頷きながら縁側に座る透子。

佳子「今朝は朝顔がずいぶん咲いたわ」

透子「うん」

佳子「今年も種、たくさんとれそうだね」

透子「うん」

朝顔から透子に目をうつす佳子。

膝を抱えて座り、ぼんやりと朝顔を見ている

透子。

佳子「恵のこと考えてるのかい？」

透子「……」

朝顔を見る目が泳ぐ透子。

如雨露を置き、透子の隣に座る佳子。

透子「あの人が、いつまでいる気？」

佳子「うん……あと少し、かね」

透子「祭りの日もいるの？」

佳子「……」

やや沈黙する透子と佳子。

透子「ねえ、お祖母ちゃん」

佳子「ん？」

透子「……あの人が、私を迎えに来たの？」

佳子「え？」

透子「学校に挨拶行ったり、法被なんか作ったり、

あの人が、私とやり直したいのかな」

佳子「それは……」

透子から目を逸らし、落ち着かない様子にな

る佳子。

透子は目の前の朝顔を見たままである。

透子「私はこの人とやり直せるかな？」

佳子「(小さく)透子、あのね」

透子「すごい嫌。本当にすぐムカツク」

佳子「……」

透子「でも」

佳子「？」

透子「法被は……ちょっと嬉しかったりするんだよ

ね」

佳子「……」

俯き、困ったように膝を擦る佳子。

佳子の様子には気付かないまま、ややはにか

んだように膝を抱え直す透子。

### ○ 常北中学校・プール

数人の生徒達に交じり泳いでいる透子。

その様子をプールサイドに立って眺めている  
美穂。

端まで泳ぎきった生徒達が次々とプールサイ  
ドにあがってくる。何番目かにあがってきた

透子に美穂が無表情で、

美穂「平山さん、息継ぎのタイミングがちよつと早

いわよ」

透子、美穂を振り返り、やや黙った後、

透子「(小さく)はい」

驚く美穂。

その様子を女子生徒A、B、Cも珍しそうに  
見ている。

何事もなかったかのように再びスタート位置  
に戻る透子の姿。

### ○ 道

やけつく様な太陽の下、自転車に乗り風をき  
つて走る透子の姿。額に汗を浮かべながらも  
表情には清々しさがある。

### ○ 平山家・居間・中

平山と佳子が並んで座り、テーブルを挟んで  
対面している恵。恵の前には白い封筒が置か  
れている。

平山「それだけあればいいだろう」

白い封筒の中を覗き、頷く恵。封筒の中から、  
少し見える数十枚のお札。

恵「ありがとうね、お父さん、お母さん」

平山「何がお父さん、お母さんだ。俺達はもうお前  
に会う気さくなかったんだ。それをこのこと」



恵、やや声を弾ませ、

恵 「わかつてる。けど、やっぱりこうやって助け  
てもらおうとさ」

平山 「助けるわけじゃない」

恵 「？」

平山 「誰が好き好んで娘を捨てて男と自由に暮ら  
している娘なんか助けるか」

恵 「……」

平山 「早く渡してお前にさっさと出て行って貰わ  
ないと、また透子が傷つくからだ」

恵 「傷つく？」

佳子 「あんた、わかっているの？ 透子はあんたが自  
分を迎えに来たと思ってるのよ」

恵 「でも私そんなこと一言もあの子に言ってるな  
んか」

平山 「言う、言わないの問題じゃないだろう。子供  
だったらそう思って当然だろう」

恵 「そんなこと言われたって私は透子を迎えに来  
たわけじゃないし」

と、障子の向こうからボタッと何かが床に落  
ちる音がする。

佳子が慌てて立ち上がり、障子をひくとブー  
ルバッグを床に落としたまま立ち尽くしてい  
る透子がいる。

佳子 「透子！」

透子 「……」

恵、取り繕ったような笑顔で、

恵 「お、かえり！ 暑かったでしょう？」

透子 「……」

恵 「あ、あ、そうそう！ あれ出来たのよ」

恵、居間の端に置いていた法被を手にし透子  
に笑顔で見せる。

無表情のまま、法被に目をやる透子。

恵が掲げた法被はつくりがポロポロでかなり  
粗末なものであるが、前身ごろの裾に赤い丸

いものが刺繍してある。

恵 「まあ、出来たって言っても、ママにはやっぱ  
りちょっと難しくてさ。こんななっちゃったけ  
ど」

透子 「……」

赤い丸い刺繍を黙って見ている透子。

恵 「でも着られないこともないと思うのよ。あ、  
ねえ、ちょっと着てみて、ね？」

平山 「恵、いい加減にしろ」

恵 「なによ、せっかく作ったのよ、私」

平山 「そういう問題じゃないだろう」

と、透子、刺繍をじっと見たまま、

透子 「（小さく呟く）金魚」

佳子 「え？」

恵、透子を見ているものに気がき、  
「あ、そう！ これ、金魚！ やっぱ透子な  
らわかってくれると思っただなあ」

赤くて円のような不恰好な金魚の刺繍。

透子 「……（じっと見ている）」

恵 「よく見ると結構可愛いでしょ？」

透子 「……死なないじゃない」

恵 「え？」

透子 「この金魚じゃ、いつまで経っても死なないじ  
やない！」

恵 「！」

と、突然、恵に掴みかかる透子。

透子 「なんでよ！ なんでそういうことするのよ！」  
慌てて透子と恵の間に入る平山と佳子。

恵 「ちよっとやめて！ 痛い！ 透子！ 痛い！」

佳子 「透子！ 透子！」

尚も恵を掴み、叩く透子。

透子 「なんでよ！ なんでよ！」

恵 「痛い！ 痛いわよ！」

平山 「透子！ 落ち着け！ 透子！」

やっとな透子を引き剥がす平山と佳子。

と、力が抜けるように座り込む透子。

透子 「……なんで金魚なんか……よくも平気な顔し  
て……」

やや沈黙した後、

恵 「……好きだったじゃない」

恵を見上げる透子。

恵、透子から目を逸らし、

恵 「いつも祭りに行くと必ず金魚見るって言っ  
てさ。あの日も金魚貰って喜んでたじゃない。だ  
から……」

透子 「……」

佳子 「あんた、それ分かってて、透子が喜んでるの  
分かかってて、それなのにこの子を置いていつた  
のかい！」

恵 「限界だったのよ！ もう限界だったの」

佳子 「限界？」

恵 「私だって、何度も母親らしくなろうと思っ  
たわよ。何度も何度もちゃんとした母親になろう  
って。この子を、透子だけを一番に考えて愛そ  
うって、何度も思ったの！」

透子「……」

ほんやりと空を見つめている透子の姿。

恵 「けど、そう思えば思うほど、だんだん苦しくなってる。どうして私だけこんな大変な思いしなきゃならないのって。それでも頑張ろうって思うのにな、怖くて、不安で……」

佳子 「あんた、母親でしょう？ 母親だったらそんなこと考えなくても自分の子供は可愛いものじゃない？」

恵 「そんな単純なことじゃなかったのよ！ みんなはそうやって簡単に言うけど、私にとってはそんな簡単じゃ……」

佳子 「なんだって、そんな」

恵、力ない目で透子をふと見て、

恵 「それにこの子だって」

佳子 「え？」

恵 「透子だって私のこと……」

顔を上げ、恵をじっと見つめる透子。

透子から目を逸らす恵。

と、突然立って、法被を引き裂く透子。

恵 「！」

皆、声も出さず、透子を見ている。

畳に落ちていく引き裂かれた法被の布。

そのまま恵をじっと睨みつけると、何も言わず、部屋を出て行く透子。手には破いた法被の破片が握られている。

佳子の声「透子！ 透子！」

透子のあとを追うことなく、目を逸らし、涙を堪えて小さく震えている恵。

○ 道

ただひたすら走っている透子の姿。

○ 平山家・居間・中

無言のまま座っている恵と平山。恵は千切れ た法被をただじっと見ている。

と、額に汗を浮かべ、入ってくる佳子。

佳子 「あの子、足が速くて……」

平山 「追いつけなかったか？」

佳子 「（頷く）」

恵 「大丈夫よ。暫くしたら戻ってくるわよ」

佳子 「よくそんな無責任なこと！」

恵、千切れた法被をかき集めながら、

恵 「母親なもの」

平山 「何が母親だ!? お前がいつ」

恵 「（遮って）母親なのよ！ これでも母親に……母親になりたかったわよ。私だってなりた

かったのよ」

佳子 「今からだって遅くないだろう？」

恵 「（首を横に振る）」

佳子 「なんで？ なんでなんだい？ なんで、そんなふう？」

恵、遠くを見るような目になり、

恵 「……あの子と二人でいて、母親になりきれない自分に気付いた時、突然無性にあの子に手を

あげたくなったの。何度も何度も」

平山 「まさかお前、透子に……」

恵 「（首を横に振り）でも、あのまま二人にいる

にはもう限界だった」

佳子 「だからあの時、こっちに帰ってきたのかい？」

恵 「（頷き）誰かがいれば自分も変われるって思

ったの。でもやっぱりダメだった」

千切れた法被と白い封筒を手にし、立ち上がる恵。

平山 「だったらなんで今更そんなもの作ったりなんかしたんだ？ 透子をむやみに期待させやがって」

恵 「私も期待したのよ、自分に。もしかしたら今

ならって。でもやっぱり……」

平山 「……」

恵 「不安にしかならないのよ。どうしようもない

くらい不安にしか」

恵から視線を逸らし、溜息を吐く平山。

肩を落とし、俯く佳子。

そのまま部屋を出て行くこうとする恵。

と、佳子、すがるように恵を見て、

佳子 「私かい？ 私があんたをそんなふうにしてしまったのかい？」

恵、ふと小さく微笑むと、

恵 「だったらどんなに楽だったか……」

そのまますまやかに部屋を出て行く恵。

○ 常北中学校・プール

プールサイドに座り、足だけ水に浸し、刺繍

の金魚を見ている透子の姿。

○ 平山家・透子の部屋・中

透子の勉強机の前に立ち、携帯で話している

恵。微かに震えた声で、

恵 「うん、貰えたから、明日そっちに帰るからね

恵 「うん、貰えたから、明日そっちに帰るからね

恵 「うん、貰えたから、明日そっちに帰るからね

恵 「うん、貰えたから、明日そっちに帰るからね

恵 「うん、貰えたから、明日そっちに帰るからね

……うん」

透子の机の上にあるノートや教科書。

それに触れる恵の手。

恵 「仕事は？……そう、そのうち見つかるわよ

……ん？ 私？ 私は……」

と、ノートの下からはみ出ているものに気がつき、それを引っ張り出す恵。

恵 「！」

透子と恵がやや離れて写っている写真。

恵 「あ、ごめん……うん、大丈夫。なんでもない……うん、大丈夫……」

言葉に詰まり、携帯を握り締めたまま声を抑え、泣き始める恵の姿。

震えた手に握り締められている、透子と恵の写真。

○ 常北中学校・プール(夕)

洋服のままプールサイドに仰向けになり、力なく空を見つめている透子。

美穂の声「ちよっと何やってるのよ」

透子「……」

何も答えず、空を見つめたままの透子。

透子の力ない姿に訝しがる美穂。

美穂「……何？ どうしたのよ？」

透子「……」

と、美穂、透子のいる脇に千切れた布があることに気がつく。布を拾う美穂。

布には不恰好に刺繍された金魚。

透子「それ、金魚なんだって」

美穂「金魚？」

透子「先生。屋台とかにいる金魚って見たことありますか？」

美穂「まあ、そりゃあ」

透子「私、金魚っていうか、あの屋台の水槽で泳ぐ

金魚を見るのが好きだったんです」

美穂「？」

透子、起き上がり、

透子「必ず一匹くらい、群れから外れてしまう金魚がいて。それを見ると凄く安心した」

美穂「そう」

透子「小さい頃はあの群れがみんなひとつの家族だと思ってたから」

美穂「(やや笑って) 大家族じゃない」

透子「たとえ、群れから離れて泳いでも、同じ水槽を泳ぐことができなければ家族でいられるって思ってた」

透子を黙って見る美穂。

夕陽の色が広がり始めた水面を見つめたままどこか遠くを見ている透子。

透子「でも違った。一度離れてしまったらダメなんだ」

美穂「お母さんのこと言ってるの？」

透子「あの人は私を愛そうとして愛せなかったって

言ってたけど……」

美穂「？」

透子「私にもそれは分かるんです」

美穂「どういうこと？」

透子「私も同じなんです。私もあの人を愛しきれなかった」

美穂「……」

透子「確かに一緒にいるのは嬉しかったけど、でもどこかいつも緊張して……息苦しかった」

じつと黙って聞いている美穂。

透子「あの人にもそれに気付いてた」

透子、微かに笑って、

透子「変ですよね、親子なのに。ちゃんと血は繋がってるのに」

小さく唇が震えている透子。

美穂、暫く黙って透子を見ていたが、

美穂「風邪みたいなものよ」

透子「え？」

美穂「うつつただけ。お母さんの緊張があなたにうつただけよ。だから、あなたが悪いんじゃない」

透子「……」

美穂「悪いんじゃない」

必死で涙を堪える透子。と、美穂が持っていた布切れを取りプールに投げる。

赤く染まった水面にゆらゆらとゆれる不恰好な金魚。

その金魚をじつと見つめる透子と美穂。

透子「本当は……たとえ息苦しくても、本当はもう一度……ママと一緒に暮らしたかった」

美穂「そう」

刺繍の金魚に水が染みていく。

透子「遠いなあ」

美穂「？」

透子「なんでこんなに遠いんだろう……家族なのに」

美穂「家族だからよ」

涙を堪えた目で美穂を見る透子。

美穂「家族になれるって案外奇跡みたいなものなのよ。だから無理もない」

透子「……」

徐々に水を吸って沈み始める金魚。

美穂「けど、きつといつかは誰もが掴める唯一の奇跡なのよ、家族って」

水面に目をやる透子。唇を噛み締め、固く握った手が小さく震えている。

水面では水が完全に染み、さっと水の底へ沈んでいく金魚。

と、突然プールへ飛び込む透子。

美穂「！」

○ 同・水中(夕)

水中で刺繍の金魚に手を伸ばす透子。

手に掴むと、そのまま水中で大きく口をあけ、泣き叫ぶような形相になる。

○ 同・職員室(夜)

電話の受話器を置くと、ややじっと考え込む美穂。

男性教員Aの声「どうかしたんですか？」

美穂、我に返り、斜め前の机に座っている男性教員Aに向かい、

美穂「いえ何でも」

男性教員A「そうですか」

男性教員A、自分の机上に目を向ける。

美穂「あの、先生のご家族ってどんな感じ？」

男性教員A「はい？」

美穂「あ、ごめんなさい、急に。ちょっと生徒のこ

とでいろいろとね」

男性教員A、やや考えてから、

男性教員A「ん〜、普通ですよ」

美穂「(呟く) 普通……」

男性教員A「仲が特別いいわけでも、特別悪いわけでもなく、まあ、盆や正月にはみんな集まってくるみたいな、そんな普通の家族ですよ」

美穂「そう」

男性教員A「でも珍しいですね」

美穂「え？」

男性教員A「あ、いや、こんな言い方失礼かもしれませんが、橋口先生が生徒のことで気をもんでる姿ってあまり……いや、すみません」

美穂「……そうね。確かにそうよ。私らしくもない」

男性教員A「橋口さんらしくなくても、先生としては、らしいんじゃないですか？」

美穂、ふと笑い、

美穂「そうね。さて、帰ろうかな」

立ち上がり、荷物を持つ美穂。

美穂「じゃあ、お疲れ様でした」

男性教員A「お疲れ様でした」

出入り口へ向かう美穂。

男性教員A「あ、橋口先生は？」

美穂「はい？」

男性教員A「ご家族。どんなご家族なんですか？」

美穂「うちは……」

男性教員A「？」

美穂「うちは血が繋がってないの。父とも母とも」

男性教員A「あ……そうなんですか」

美穂「でも、ちゃんと掴めたわよ」

男性教員A「？」

美穂「普通の家族ってやつ」

美穂、にっこり笑うと部屋を出て行く。

○ 平山家・前(夜)

薄暗い道を大きめのジャージを羽織り歩いてくる透子。髪はまだ少し濡れている。と、家の前で足を止める。

立っている恵の姿。恵の目はやや赤い。

恵「おか、えり」

透子「(俯いたまま)……」

恵「先生から電話貰ってね、ほら、部活の」

透子「(なおも俯いたまま)……」

恵「なんかきつそうな人かと思ってたけど、案外あれだね、やさしいところもあるんだね、なかなか。ちょっと安心したわ」

透子、恵を見ることなく、

透子「思ってる通りだよ」

恵「なにが？」

透子「私もあなたのこと好きになれなかった」

恵、一瞬目が泳ぐが、透子を見たまま、

恵「そう」

透子「(小さく) けど、嫌いにもなれなかった」

恵「……」

と、透子、顔をあげ、恵を見ると、

透子「いつ帰るの？」

恵「明日にはと思ってる」

透子「誰か待ってるの？」

恵「え？」

透子「今ひとりじゃないんでしょ？ 誰かと一緒に

いるんでしょ？」

恵 「(小さく頷き)ひとり、ちよつとね」

透子 「……ふうん」

やや黙り込む二人。

と、恵の脇を通り抜け、家の中に入ろうとする透子。

恵 「透子！」

恵に背を向けた状態で足を止める透子。

恵 「手紙……手紙書くから。定期的にとかつてのはママにはたぶん無理だけど、でもちゃんと書くから。だから、読んで。返事くれなくてもいいから、読んで、ね？」

と、透子、前を見たまま小さな声で、

透子 「……祭りは？」

恵 「え？」

透子 「祭りくらい見ていけば」

恵 「！」

そのままスタスタと家の中に入る透子。

○ 同・透子の部屋・中(朝)

身支度を整えている透子。

と、障子を開け、佳子が入ってくる。

佳子 「もうそろそろ行くのかい？」

透子 「うん、本番まで練習するんだって」

佳子 「そうかい」

と、手に持っていたものを透子に差し出す佳子。綺麗に畳まれた法被である。

透子 「法被？」

佳子 「急いで作ったからちよつと粗いかもしれないけど」

透子 「作ってくれたの？」

佳子 「(笑顔で頷く)」

透子、嬉しそうに法被を受け取り、

透子 「ありがとう」

佳子、再び笑顔で頷くが、急に真剣な顔になり、法被を持つ透子の手を握る。

佳子 「恵のこと、すまないね。本当にごめんね」

透子 「……」

ぎゅつと一度強く透子の手を握った後、部屋

を出て行くこととする佳子の背中に、

透子 「朝顔、今朝もいっぱい咲いてたね」

透子の言葉に振り向く佳子。

透子 「(笑顔で)今年はお祖父ちゃんにも手伝って

貰わなくちゃね、種とり」

佳子 「(笑顔で)そうだね、みんなでどううね」

透子 「うん」

そのまま部屋を出て行く佳子。

透子、法被を勉強机の上に置くが、そこにあるよれよれになった刺繍の金魚に目がいく。

じつと何かを考える透子の姿。

○ 岩上神社・外観(夕)

赤い鳥居の下を、浴衣や法被を着た人々などがくぐっていく。

境内のほうからは提灯や屋台の灯りが見え、

お囃子の音が響いてくる。

○ 同・本堂前(夕)

本堂の周りにも人々が行き交い、座って話をしたり何か食べたりにしている。

本堂の軒下をじつと見て立っている透子の姿。

手には法被が握られている。

と、手を繋いだ母親と小さな女の子が通り過ぎて行く。その女の子の手には金魚が二匹入った袋が握られている。

思わず、金魚を目で追う透子。

小さな袋で泳ぐ二匹の金魚たち。

法被をぎゅつと握り締めると、踵を返し歩き出す透子。

徐々に本堂の軒下が遠くなっていく。

○ 同・槽裏(夜)

法被姿の子供達がそわそわしながら集まっている。その中にある女子生徒A、B、Cの姿。

女子生徒A 「やく！ 次だよ、次！ もうやだあ、どうしよう」

女子生徒B 「(眩く)みんなジャガイモ、みんなジャガイモ」

女子生徒C 「そんなの効くわけないじゃん」

女子生徒B 「えく、いいって聞いたもん」

女子生徒C 「てか、それ法被反対じゃん」

女子生徒B 「え！ うそ!？」

講師の声 「よし！ じゃあ行くぞー！」

女子生徒B 「やだやだどうしよう！」

と、三人の顔を法被を着た透子を通る。

女子生徒A、透子の背中を見ると驚き、

女子生徒A 「あー！ 透子ちゃんすごーい！ すごーい可愛いよー！」

女子生徒C 「あ、ほんとだ」

女子生徒B 「自分でやったの？」

女子生徒A 「あ、ほんとだ」

女子生徒B 「自分でやったの？」

透子「(小さく頷く)」

女子生徒A「すっごーい！」

透子「(笑顔で)ありがとう」

驚く三人。

透子、照れたように歩き出す。透子の背中越

しに聞こえる三人の声。

女子生徒Cの声「笑った」

女子生徒Aの声「すっごーい!!」

○ 櫓 上(夜)

透子、櫓上へ上がる階段の前に来たときに見

物人のほうに目をやる。

と、見物人の後ろの方に立ち、透子を見てい

る恵の姿に気付く。ただじつと透子を見てい

る恵。

じつと見つめ合う透子と恵。

と、透子、階段を上がり、自分の和太鼓の位

置につく。

○ 櫓 下(夜)

透子のうしろ姿を見て、はっとした顔になる

恵。

透子の法被の背中には、恵の作った不恰好な

刺繍の金魚が縫い付けてあり、その金魚を囲

むように、手描きの可愛い金魚の絵がたくさ

ん描かれている。

○ 櫓 上(夜)

講師の声「よーおっ！」

掛け声とともに始まる力強い演奏。

必死に和太鼓を叩く透子の姿。

○ 櫓 下(夜)

透子を見ながら、涙を堪えている恵。

その唇は「ごめんね」と何度も何度も動いて

いる。

と、櫓に背を向け、去って行く恵。

○ 櫓 上(夜)

恵を見ることなく、額に汗をかき、ただ一心

不乱に和太鼓を力強く叩き続ける透子の姿。

透子の背中で泳ぐ何匹もの金魚。

真っ直ぐに前を見る、透子の力強い瞳。

○ 平山家・透子の部屋・中

掃除道具を持って入って来る佳子。

T『数日後』

畳を箒で掃こうとしたとき、透子の机の上に

何か広げられているのに気付く。

机上には、開封済の封筒と白紙の便箋。

封筒の表には『平山透子様』とあり、裏には

『平山恵』と書かれている。

白紙の便箋を見ると、最初の行に、『Dear

ママ』とだけ書かれている。

と、障子を明け放ち、明るい光が入った部屋

の畳を掃き始める佳子。

箒を掃く佳子の顔には微笑みがある。

○ 常北中学校・プール

真夏の強い陽射しの下、プールサイドの椅子

にやる気なく座っている美穂。

プールの中では相変わらず女子生徒A、B、

C達が固まってはしゃいでいる。

と、響き渡る水に飛び込む豪快な音。

水音の方を見る一同。

美穂、立ち上がり、大声で、

美穂「だから飛び込むなって言ってるでしょう！」

と、水中に潜っていた体が上昇してきて、透

子が顔を出す。透子、大声で、

透子「はーい」

一同「！」

驚き、透子を見る一同。

見合う透子と美穂。

と、小さく笑んで再び泳ぎ始める透子。

美穂、ふっと笑い、

美穂「まったく」

夏の陽射しを受け、きらきらと光る水の中に、

ぐんぐんと力強く泳いでいく透子の姿が見え

る。